

人の見を抱いて今宵もほろろりと
らほてゐるませに酒をたれた
凡平

気まぐれの旅に小樽へはぐれん
グダ新三と街の酒のむ
凡平

北門新報の記者として一九一八年に小樽に来た並木凡平（本名篠原三郎 一八九一～一九四一）は、のちに小樽新聞の

記者となり同紙の短歌欄の選者として、また、『新短歌時代』編集発行人、『青空』編集として北海道における口語短歌運動の一翼を担いました。西出朝風・青山霞村らの先人から徐々に広まっていった口語短歌運動は、傍流でありながらしかし現在まで続く流れとして受け継がれています。

本展では、口語短歌運動の起こりから、小樽ゆかりの歌人である並木凡平の活動、そして戦後から現在に至る口語歌の発展の道程をたどります。



『新短歌時代』



『青空』

講演会「口語短歌運動と現在」
 2025年3月15日(土) 14時～15時30分
 場所:市立小樽文学館1階研修室
 講師:山田 航(歌人)
 定員:40名 聴講無料
 申込:電話(0134-32-2388)
 またはLogoフォーム QRコード



並木凡平 (なみき ぼんぺい) 1891-1941

歌人。札幌郡元村生まれ。本名・篠原三郎。

1897(明治30)年に両親と台湾台北に移住。1905年に両親が亡くなり叔父に引き取られ札幌に戻る。1906年頃から『文章世界』等に和歌、俳句、短文を投稿。一時上京し、牛込区砂土原町に住む内田魯庵の通い書生となるも1年あまりで帰郷。1909年に北海新聞社の社員になり、以後40社以上をわたりあるく。

1918(大正7)年、小樽、北門新報社に入社。1920年、小樽新聞社社会部に招聘され入社。1924年1月6日、小樽新聞に初めて「並木凡平」の筆名にて口語短歌3首発表。1927(昭和2)年12月、編集発行人を務める『新短歌時代』創刊。1931年4月、『新短歌時代』終刊(通巻34号)。6月、編集を務める『青空』創刊(発行人は青山ゆき路)。1933年、歌集『赤土の丘』を刊行。

1937(昭和12)年、小樽新聞社を誠首され、生活の足しにするために「凡平歌コップ」を制作販売。1939年、北海日々新聞社に入社すべく小樽を離れ、室蘭へ。1941年6月、120ページに及ぶ『青空』創刊満十周年記念号を刊行。同月に結成された北海道歌人協会結成の評議員に就任。8月5日、室蘭タイムス社編成局次長に昇進。9月、薪割りをして左人差し指を負傷し、その悪化により急逝。

自ら口語歌壇の「ラッパ卒」と称し、編集をつとめる『新短歌時代』や『青空』、そして当時強力なマスメディアであった小樽新聞をとおして口語定型歌を北海道に広めるとともに、生活即短歌を唱え平明にして率直な口語歌を詠んだ。

小樽市朝里不動尊境内には歌碑があり「廢船のマストにけふも浜がらす鳴いて日暮れる張碓の浜」の歌が刻まれている。



凡平の歌が刻まれたリキュールグラス

JR函館本線		●小樽駅
●小樽経済センター		
●産業会館	長崎屋	●サンビルスクエア
都通り		
●オーセントホテル小樽		
旧手宮線		
金融資料館 (旧日本銀行)	●市立小樽文学館	
	●郵便局本局	
	●小樽芸術村	
	小樽運河	



公式ホームページ



公式 X (旧 Twitter)

〒047-0031 小樽市色内1丁目9番5号
 tel/fax.0134-32-2388